

巻頭言

コデンタル教育

明倫短期大学 学長
内田 安信



歯科医療の必須なサポーターでありパートナーである歯科技工士、歯科衛生士の重要性は、今日、社会における認知度の高まりと共に益々その活躍の場が広がりつつある。歯科医学は一般の医学とは学制が異なり、別々の学部教育が設けられており学科課程の差異もあって、同じ理科系で医療系であっても、片や医学分野であり片や歯科医学分野なのである。その歯科医学の臨床分野での専門職として活躍の場が広がりつつあるのが、歯科技工士であり歯科衛生士なのである。

そのような大事な部門を担当し、いまや歯科医療にとって不可欠な存在が、両職種なのであって前述の、医療における臨床検査技師や看護婦がこれに相当する。すなわち歯科医師の指導の許でその専門学識と技能とを十二分に発揮出来、活躍できる国家資格を備え持っているわけである。歯科衛生士の場合は、診療の場で、患者さんと接触して予防歯科医療の相当部分を担当できるものの、歯科技工士の場合は、現行法では患者さんに接触できず、歯科医師のオーダーによる口腔歯牙模型を相手の、技工作業が主となり、模型の歯牙を通して患者さんをイメージするだけである。世の多くの歯科医が、歯科技工士を歯科医院に常勤させることなく、補綴物を街の技工所に外注する傾向が増加するにつれ、この傾向すなわち患者さんの顔も見ない俣の補綴物作製が益々増加し、私の指向する臨床にタッチ出来る歯科技工士の活躍の場が、ついぞ狭小化するものと思われる。せめて歯科医師から指示書だけでなく口頭での細かい説明があつてこそ、初めて患者さんにヒットした精緻な技工物が完成される筈のものであろう。歯科医療関係者のその際の喜びは計り知れない程大きなものがある。

従って、歯科衛生士に近い形で歯科技工士が臨床にタッチ出来るよう、法整備に向けて技工士会や歯科医師会も動くべきであろう。さもないと技工士という専門職種は、いつも陽の当たらないままになってしまう。これは私が、“常に技工士と共に歯科の外来診療を永続して行ってきた”経験からの実感である。患者さんを目の前にして、自分の全知全能を十分発揮でき、歯科医師、歯科衛生士と共に歯科技工士も、診療終了後共に喜びを分かち合える環境が醸成出来れば、きっと今より遙かに技工士が世間から認知され、3者お互いが共栄発展することは間違いないであろう。ただし、このような私の意向・信条は若干世の趨勢に逆行する世間知らずの考察と写るかも知れない。

何となれば、手作り技工物には限りがあつて少人数規模でも技工所を経営し、そこに勤務して商業原理に基づいた速配下での技工品の外注が当世の主流をなしてきているからである。この点で常日頃、学生に対しての私の言葉、すなわち「我々は患者と常に共に在る」の態度と心は、卒業後残念ながら今直ちに生かされそうにもないからである。しかしながら、私は敢えてこの「提言」を現代に残して置きたい気持ちで一杯である。

社会のニーズ、そして“患者のための医療人の資質向上”と言え、誰しも我々の自主自学、研鑽には反対する理由は全く無く、それが例えば歯科技工士、歯科衛生士共に2年制から3年制への修業年限の変更や、教授内容の見直しなど、無関係ではなく、それは今、大きなうねりとなってその移行期にある。今後の日本の良質な歯科医療の提供に必要な技能、学識、業務の質の向上は、喫緊の要事に他ならない。

本学においても特に衛生士学科については、夙にこ

の問題を重視して、平成13年3月21日の教授会で3年制のカリキュラム案が既に発表されている。その後日本歯科医師会の動向と他大学・専門学校の状況とを睨み合わせ、更には、我が国唯一の技工士学科の短大併設の絡みも有って、わが短大においては、両学科の足並みをどう揃えるかなど、学内事情が関連してきており、現存の専攻科の扱い、そして4年制大学への予定も有って、現状分析から将来展望に向けての検討が進められている最中である。今日、日本の短期大学を取り巻く環境はどこの大学でも一様に厳しいものがあるが、本学とても同様環境に曝されており、それらを超えて更に歩一歩を進める意向を堅持している。

さて、そのような行政・教育環境の下で、大学、短大、専門学校それぞれの望ましい教育は如何に有るべきかは、常に問い直されてきた問題であり、教職にある我々にとっては瞬時も忘れられない忽せに出来ない重大問題なのである。本学の教育の基本理念は今さら言うまでもなく、専門性を十分発揮できる学識と歯科医療の臨地・臨床実習体験を元に、それが直ちに卒後医療社会へ還元できる学術を身につけた学生の育成にある。併せて、当然すぎる程当然な教育姿勢として、医療人として人格（言葉、態度、服装、マナー、患者への思い遣り、共感、奉仕の心など）の訓育には全学を挙げて取り組み、とりわけ学生に対しては厳しく指導要請してきている。これらは、実際に医療の実社会で直ぐさま必要とされる大事な徳目であるだけに、卒後親許を離れて初めて大学の有り難さが分かったと言う卒業生、そして勤務先の歯科医師の言からも、これらは明白である。学生時代に身につけた体験学習は習い性となり、医療人としての人生をどれ程満足して享受できることか、充実度とその楽しさ豊かさは、測り知れないものがある筈である。

社会がどのように変遷し驚天動地の異変が起ころうとも、専門的な技倆と心の豊かささえ身につけた人にとっては、適応し強く生き抜いていけるものと信じている。学生教育に携わる我々にとり実は油断できないことがある。それは、自らを省みて教員の資質向上に努めねばならないことそのものである。指導経験に加え、資格要件をどの程度充足しているか、講義は固よ

り実習教育は充実しているか、果ては、教員としての適性はどうかなど自省をこめて、常に学生の学習意欲を振起すべく努めるべきである。自己点検自己評価は、何も大学に限った事柄ではなく、教員自身に向けられるべきものであることを強く銘記すべきであろう。

本学は、技工士学科・衛生士学科を併設しているわが国唯一の短期大学であり、それだけに相応の覚悟を持って教職員一体となって短大としてのカリキュラムのもと、学生の教育に力を傾注しているが、短大としての特色として、地域性がある、地域に根を下ろし地域と共に発展していく立場にもある。開学6年目を迎えるに当たり、若干地域外の近県及び他府県から入学生を迎えることができるようになったことは、地域性プラス唯一の短大としての知名度が少しく知れてきたことかも知れない。

2年制の下で情操豊かで人間性溢れる教育を、基礎・専門科目の充足の中で実施し、実習や臨床実習をも完全実施を果たさんとする時、カリキュラムは過密たらざるを得ず、衛生士学科と同様、技工士学科も歩調を合わせて矢張り3年制を目論むべきか否かが、当面の喫緊かつ重大な課題となっている。これには、学生と父兄、教職員、そして短大を取り巻く教育・経済環境などの動向が、本学の今後の動向の鍵を握っているものと言って良い。

私は、本学の開学以来常々「歯科技工士による歯科技工士のための短期大学」、「歯科衛生士による歯科衛生士のための短期大学」造りを言明し、公表してきた。すなわち、学生及び教職員の絶大な努力によって、既に基礎造りが半ば進行し、そろそろ歯科技工士、歯科衛生士の教員による実習指導は固より、講義も実施の段階に入っている。それは当然の事ながら歯科技工士学、歯科衛生士学の確立である。次代を担う若い教員が意欲を燃やして、熱心に学生の教育活動に尽瘁している姿を見るにつけ、本学の未来は明るく希望に輝くものと信じている。

今後の将来展望として、両職種共に我々にとって必須なコデンタルであり、従来と違った広い視野からの新たな意識で接遇しなければならない。そのため歯科医師の我々が今こそ夫々の専門性を認知し、高く評価

して、授業はもとより学事・教育を含めて専任業務を、思い切って両学科の教員に相当程度委任すべきであると考えている。その時、患者のためのチーム歯科医療が、遥かに高い立場や見地から、社会的に拍手をもって迎えられること請け合いである。学問が成り立ち、教員が育ち、歯科医療の質が格段に向上すれば、これこそ望ましい在るべき姿の真なる歯科医療である。すなわち患者さんのための真の歯科医療である。いまここで、医科におけるあの看護学の発展を見よ！と言って置かねばならない。

擱筆したところで偶々、本日12月6日に、国会は議員立法で看護婦の名称を「看護師」と変更することを

決議可決した。ジェンダー問題は現代を象徴する重要な事項であり、男女共同参画社会を背景に、医科の医療チームは、真のチーム医療を目指して発展の一途を辿ろう。ここでも歯科医療チームは、医科の医療チームに一步先んじられ、水を空けられた感じである。

医学とは相応の差異のある歯科医学、そしてそれぞれの医療には、医師、歯科医師を中心としてコメディカル、コデンタルという必須な分野の専門職がある。今や医療と同様歯科医療においても、コデンタルの situation, 分限向上こそが、今後将来の歯科医学・医療の持続可能な発展を招来する最重要な基盤であることを深く銘記しておきたい。 (平成13年12月6日)